

「はなれていても家族」

及川 那奈

「早くしなさい。おそいよ！」することがおそいわたしに、お姉ちゃんがい  
つも言います。わたしには、十二才年上のお姉ちゃんがあります。お姉ちゃん  
は、まるで小さいお母さんのよう。「もうるさいな」わたしも言い返すの  
で、ついけんかになってしまうこともありました。そんなお姉ちゃんが、大学  
を卒業して就職が決まったので、家を出てひとり暮らしをすることになった  
のです。お姉ちゃんが家を出てからは、今までより家の中が静かになり、  
テレビの音しか聞こえない時もありました。今までうるさいと思っていたお  
姉ちゃんの言葉が少し恋しくなっていて、さみしく思うことも少なくありませ  
ん。わたしは心の中に穴があいたような気持ちになりました。そんなある  
日、お姉ちゃんが久しぶりに帰ってきたのです。わたしはとてもワクワクし  
てテンションが上がり、帰ってきたお姉ちゃんに走り寄り抱きついてしまいま  
した。するとお姉ちゃんは、「ちょっと暑いからやめて」と言いました。またお  
こられた。と思ったその時、お姉ちゃんはわたしの肩を引きよせて「ぎゅー」  
としてくれたのです。わたしは顔面の力がぬけたみたいに笑顔になりました。  
た。そして、ちょっとなみだ目になりながら、そっとお姉ちゃんの右うでにし  
がみつきました。どんなにはなれていても家族。言葉がなくても心が通じ  
合ってるね。やっぱり家族っていいな。